

## ■プレゼンテーション 1■

### がんや神経難病の患者・家族と哲学対話をする

キーワード：がん、ALS、哲学対話、哲学カウンセリング、哲学カフェ

佐野 桂子

がんやALS（筋萎縮性側索硬化症）などの難病の多くは、現在のところ根本的な治療法が確立されておらず、病名の告知と同時に死を意識することを余儀なくされる。一方で、医療技術の進歩に伴ってこれらの病を抱えながら生存する者も増加しているが、患者本人また家族も長期療養と介護を強いられることとなり、その心理的負担ははかりしれない。現在、我々は哲学者中岡成文をファシリテーターに、がん患者や患者家族に月1度の頻度で哲学対話を行っている。

今回我々が採用する哲学対話は、臨床的テーマに習熟し、対象疾患の患者・家族と接した経験が豊富なファシリテーター（進行役）によるリードが重要である。

問いやテーマは、疾病に伴う困難、不安や死とかかわりつつも、一定程度それを一般化したものであることが多く、対話を通して他人の意見に耳を傾け、自らの思考や態度を振り返り、それらを違う角度から見つめなおすことができる。「対話を通じて問題を問うていく」という点では心理療法と共通点があるとも言える。また、認知療法における認知とはたいていの場合「言語化された思考」を指し、それは哲学対話の対象や方法と重なりあう面がある。他方、哲学対話は、固定された方法論を採用して、一定の「病因」の解明や解消を意図するのではない点で心理療法や認知療法から区別される。がんやALSの患者・家族には多様な精神的ニーズがあり、それぞれに適切な対話の種類がある。哲学カフェのタイプは、生きること・死ぬことについて掘り下げて考え、1時間～1時間半程度他の人々と対話したいと希望し、またそれに見合う体力・気力をもつ当事者が対象となるが、対話の結果、新たな思考と勇気をもって闘病に再び取り組む効果をもつと考えられ、これらについて研究することは今日大きな社会的意義を有する。

具体的には、現在（8月28日）までに経験した3回の実践の紹介を通して、有効点と改善点、その具体策を検討したい。

（さの・けいこ）がんやALSなどの神経難病の患者、その家族らと哲学対話を通して他者の話に耳を傾け、生きるとは何かを再考することによって療養生活の精神心理的なケア・サポートの一環となることを目標にしています。